

## 外国語児の日本語学習のための絵本・アプリの開発—実際の言語学習メカニズムを踏まえて—

趙 墨 (広島大学 教育学研究科 大学院生)

## 1. 研究の背景と目的

グローバル化が進むにしたがい、出生地と異なる国・地域に在住する子どもが増えている。日本に在住する日本語を母語としない子ども(以降、外国語児)も増加の一途を辿っており、現在2万8千人もの外国語児が日本語の支援を必要としている(文部科学省2015年公表データ)。特に、言語能力の中軸ともなる文を理解する能力は日常生活で不可欠な言語能力であり、学校での教科学習に必要な言語能力の基礎を支える上でも非常に重要なものである。これは例えば、「ウサギさんをクマくんが押して、ブタくんもクマくんを押した」などの、教科書を始めとする教材で使用されている文を正確に理解するのに不可欠であるということからも明白であり、これらの文を理解するには格助詞を正しく理解する能力が必要である。本研究の目的は、外国語児の日本語の他動詞文中で目的語を標示する格助詞「ウサギさんをクマくんが押して」(以下、格助詞)の学習メカニズムを解明し、そのメカニズムに見合った教材(絵本・タブレット型学習アプリ)を開発することである。

## 2. 研究の内容

## 【格助詞学習のメカニズムの検討】

日本語を母語とする日本語児が格助詞を学習する際、項が省略され、語順や項の数といった言語情報の少ないシンプルなOV文(「目的語-格助詞-動詞」文)の方が、項が揃った、言語情報の多いSOV文(「主語-格助詞-目的語-格助詞-動詞」文)よりも有効である(趙・酒井, 2015; 2017)。本研究では、3歳から10歳の間に学校などで日本語に本格的に触れ始めた外国語児(6歳から9歳)を対象に、まず、(1)外国語児がどれほど格助詞を理解できているのかを調べ、次に、(2)格助詞の学習において、言語情報の少ない項省略文と言語情報の多い項揃った文のどちらが有効なのかについて調べた。

結果として、(1)対象の外国語児が格助詞を十分に学習できていないことが示唆された。また、(2)言語情報の少ない、項が省略された文で格助詞が呈示された方が格助詞の学習に有効であることも明らかになった。

## 【学習メカニズムを踏まえた教材の開発】

外国語児の目的語標示の格助詞において、言語情報が少ない項省略文の方が有効であるという研究結果を踏まえ、教材を開発した。具体的には、項が省略された文で格助詞が呈示された文が使われた、月ごとの季節のイベントを子どもの視点から紹介した絵本とアプリケーションを開発した。教材は、ストーリーと季節のイベントの説明(図)、クイズから成り立っている。絵本については、「季節のイベントの説明」が多言語対応(日本語・中国語・英語の表示あり)で、アプリについては、「ストーリー」に読み上げボタンがついており(図の右端)、それを押すと日本語はもちろん、中国語と英語の音声も出るようになっている。これは、日本語がまだよくわからない子ども

が内容を理解できること、そして、日本語に長く生活していることで母語を忘れてしまわないよう、日本語のストーリーを母語でも話せるように練習をしたり、母語の学習の動機付けとして活用されることを目的とした工夫である。

## 【教材『「を」べんきょうしよう』の使用】

外国語児6名(小学校1年生3名, 2年生3名の外国語児)に『「を」べんきょうしよう』(絵本・アプリ)を使用してもらった。(アプリ URL: file:///Users/zhaozhao/Desktop/ehone-web4/index.html)使用前は、12問の格助詞テストにおいて25%の正答率であったのに対し、使用後は約80%にもなった。何より、積極的に絵本を読み、文を聞き、クイズを行うことで日本の季節のイベントに興味を持ち、学習意欲の向上へと結びついていた。さらに、外国語児が多言語対応の機能を使い、自分の母語では言い表せない動詞や名詞を母語で表し、母語ももっと勉強しなければいけないという意識を持ち始め、日本語、そして母語、さらには外国語(英語)の学習の動機づけになったと考える。

## 3. まとめと今後の課題

本研究では、日本語の目的語標示の格助詞の学習メカニズムを踏まえた教材を開発した。外国語児はその教材を積極的に使用し、格助詞を学習していた。今後は、他の格助詞の学習との関連、具体的には例えば「ニ」と「ヲ」の使い分けについても検討し、子どもたちに、格助詞と格助詞の間の関連について考えさせるような教材を開発していきたいと考える。



図 『「を」べんきょうしよう』ストーリーの一例(8月)